

Title	大学生生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか： 新入学生の大学組織への適応・同化過程の継時的分析をととして
Sub Title	The impact of academic and extracurricular activities upon the development of college students
Author	西河, 正行(Nishikawa, Masayuki) 佐野, 勝男(Sano, Katsuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1983
Jtitle	哲學 No.77 (1983. 12) ,p.149- 184
JaLC DOI	
Abstract	The developmental process of newly-matriculated students in a private university was monitored over a four-year period (from the entry point to the point of graduation), utilizing written questionnaires and personal interviews. The impact of the student involvement in the academic and extracurricular activities in the freshman year upon the fouryear development of their college lives was examined. This examination was conducted on two groups : 1) students in the department of economics, and 2) students in the department of engineering. Results of the analyses indicated : 1) the two activities considered were found to have impact upon the different aspects of assimilation and developmental processes of the students' college lives, 2) the extracurricular activities had a more important impact upon the occupational socialization process than did the academic activities, and 3) these results were very similar between the two departments examined.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000077-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

大学生活は学生のキャリア発達に
どのように影響を与えているのか

——新入学生の大学組織への適応・同化過程
の継時的分析をとおして——

西河正行*・佐野勝男**

*The Impact of Academic and Extracurricular
Activities upon the Development of
College Students*

Masayuki Nishikawa and Katsuo Sano

The developmental process of newly-matriculated students in a private university was monitored over a four-year period (from the entry point to the point of graduation), utilizing written questionnaires and personal interviews.

The impact of the student involvement in the academic and extracurricular activities in the freshman year upon the four-year development of their college lives was examined. This examination was conducted on two groups: 1) students in the department of economics, and 2) students in the department of engineering.

Results of the analyses indicated: 1) the two activities considered were found to have impact upon the different aspects of assimilation and developmental processes of the students' college lives, 2) the extracurricular activities had a more important impact upon the occupational socialization process than did the academic activities, and 3) these results were very similar between the two departments examined.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会心理学・生涯発達論)

** 慶應義塾大学文学部教授 (社会心理学・パーソナリティ論)

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

1. はじめに

現代社会において大学生活が、青年の社会化にとって重要な機能を果たしていることはまちがいない。大学教育が職業人や専門家を育成することを最大の使命とすべきか、人格陶冶を目的とする教養人教育を重視すべきかはいずれとしても、大学は教育を通して学生の「将来を見越しての社会化——予期的社会化」の機会を提供していることは事実である。急激に変化していく現代社会にあって、将来にわたって有効であり続けるような社会化の実現は困難であるとしても、大学教育は本来、個人の青年期における発達課題の解決に積極的に役立つことが期待されているといえよう。

ところが、現実の大学教育はそうした社会的な期待に充分応えていない、という批判がしばしばなされている。たとえば、大学レジャーランド論のごときがそれである。

大学のレジャーランド化・社交場化というのは、1950年代以降の高等教育の量的規模の拡大によって、能力や関心の様々に異なる大学入学者が増加し、それにつれて大学生活そのものが多様化していった状況を指している、と一般に考えられている。

それは大学教育との関連でみるならば、学生の関心の多様化に伴う大学教育への期待の相対的低下として捉えられよう。たとえば、『進学動機調査』（日本リクルートセンター、1980）をみると、そうした傾向がはっきりと読みとれる。『進学動機調査』は大学や短大に進学する者が、進学したらどのような学生生活を過そうと考えているかについて、4つの志向性に分類している。すなわち、

- ①専門志向 大学に進学したらあまり余計なことはやらず、もっぱら大学での専門的な勉強に打ち込み、将来の職業に役立てたい。
- ②レジャー志向 大学を卒業したら仕事や生活に追われることになるだろうから、学生時代は勉強は要領よくやり、クラブ活動や趣味などに力を入れ、できる

だけ学生生活を楽しみたい。

- ③社交志向 大学に進学したら、どちらかといえば、勉強に力を注ぐよりも、いろいろな人とつきあったり新しい経験をつんだりして、人間性や社会性を身につけ、将来にそなえたい。
- ④教養志向 大学に進学したら、専門的な勉強ばかりでなくできるだけ幅の広い知識や教養を身につけ、自己の人間的成長をはかりたい。

である。

調査結果 (N=3920) をみると、レジャー志向と社交志向をあわせた、いわば〈あそび型〉が51%を占め、大学での専門的な教育を期待する〈専門志向〉の層は僅かに10.6%にすぎない。37.1%を占める〈教養志向〉を入れても、二人に一人しか大学教育に対する期待をもっていないことになる。

さらに大学教育の形骸化は、高等教育の量的拡大に必然的に付随すると考えられる学生の意識の変化に、大学そのものが効果的に対処できなかったことによって一層促進されたといえる。たとえば、天野 (1980; pp. 210-222) は、大学紛争以降の大学改革について、「これらの改革はいずれも高等教育の構造そのものを抜本的に変革するというよりも、…外枠だけの改革をめざすものであった。改革は少なくともこれまでのところ大学の内部にまでは及んでいないのである」と述べている。

もし大学教育が本当に形骸化しているとするならば、人生における重大な岐路に立たされている青年にとって、大学は大学卒という肩書きを得る以上に積極的な意味をもちうるのかどうか甚だ疑問とせざるをえない。生涯にわたる人間の人格的・社会的発達を考えた場合、個人が青年期に大学教育を受けるといふことはどのような意味をもっているのであろうか。また「大学内部の改革」とはどのような方向を指向すべきであらうか。

本稿は、大学教育も含め大学生活そのものが学生に4年間を通してどのように影響を与えているのかについて、ひとつの実証的な考察を試みるものである。

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

とりわけ本稿では、大学生活における「課内」活動と「課外」活動とが、学生の大学生活そのものへの適応と同化、それに密接な関連をもつと考えられる学生の職業的・社会的社会化という二側面に対してどのように影響を与えているのか、また、それはいわゆる“文科系”学部と“理工系”学部ではどのように異なっているのか、という点に分析の焦点をあてる。

大学生活が学生の人格的・社会的発達に与える影響に関する主要な研究のひとつは、college impact というテーマのもとに進められてきている。college impact とは“impact of college characteristics”，より正確に言えば，“comparative impact of different collegiate experiences”ということである。ここでは、学生自身の変容 (student output data) が入学時点での学生の特性 (student input data)，入学した大学の特質 (data on the college environment) および大学生活に対する学生の関与のあり方⁽¹⁾ (data on the extent of students' involvement in the college environment) との関連で分析されるのである (Astin, 1970a, 1970b, 1977; Lacy, 1978)。Astin (1970a, 1970b) は college impact 研究に今後強く望まれることとして，“multi-institutional data” (対照的なタイプの大学に在学する学生について同時的に収集されたデータ) と “longitudinal data” (入学時から継続的に集められた学生の変容過程に関するデータ) の使用をあげている。このように最近の college impact 研究は、多数の大学から得られた大規模サンプルにもとづいて継続的な研究が進められる傾向がある。また、Feldman and Newcomb (1969) が指摘するように、学部や学科が教師と学生の双方にとって一種の “home” となっている現状を考えたとき、大学間の比較ばかりでなく同一の大学内での学部間あるいは学科間の比較も考慮されなければならない。

以上のような論義をふまえるならば、本稿における問題関心は「大学生活に対する学生の関与のあり方」と「学生自身の変容」との関係を「所属学部の特質」との関連のもとで究明することにあるといえよう。また、

Astin の言う “multi-institutional data” と “longitudinal data” になら
 っていえば、本稿に報告する分析は次のような特徴を備えている。第一点
 は、同一の大学の中の “文科系” 学部とそれに対比させるかたちで “理工
 系” 学部の二学部の学生から同時的にデータを収集したことである。すな
 わち、わたしたちは、“文科系” 学部の典型として〈経済学部〉に、“理工
 系” 学部の典型として〈工学部〉に着目した。第二点は、新入学生をかれ
 が卒業するまで4年間、継時的に追跡・観察している点である。このよう
 な “longitudinal data” を使用することによって “cross-sectional data”
 にもとづくいわゆる横断的研究に伴う潜在的な危険性を回避することがで
 きる (Baltes, 1977)。横断的研究に含まれる問題点は、本稿にとりあげた
 研究を例にとれば、たとえば次のようなことが考えられる。特定時点で大
 学1年生と大学4年生とを比較する場合、4年生は留年や休学者などを含
 まない、いわば “生き残った” 学生から成っているわけで、かれらを新入
 学生である1年生と単純に比較することは危険である。また、入学時点の
 異なるサンプルを使って比較する場合、それぞれのサンプルには特定の選
 抜方法や社会情勢などの効果、いわゆるコーホート効果が働いている可能
 性があり、単純な横断的な比較から確たる結論を導出することは困難で
 ある、などである。

2. 分析の枠組

本稿では、「大学組織における学生の〈自我同一性確立過程〉の長期的
 追跡研究」(南ほか, 1977; Wakabayashi *et. al.*, 1977; 南ほか, 1980) と
 称される研究プロジェクトにおいて収集し蓄積されたデータ・ベースを利
 用する。分析にもちこまれた諸変数は表1に示すとおりである。

(1) 変 数

●独立変数

本稿における実証的考察の関心の焦点は、所属学部における「課内」活

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

動と「課外」活動への学生の関わり——とくに、大学1年次におけるそれぞれの活動への関わりかた——が、それ以降4年間にわたる大学生活を通して、かれにいかなる影響を及ぼしているかという点にある。前述したデータ・ベースの中でこの研究目的に照して利用可能な変数(独立変数)は、「大学生活諸側面に対して現在、時間とエネルギーをいかに配分しているか」(大学生活のすごし方)を尋ねた80の質問項目から因子分析によって抽出された5因子の内、以下の2因子である。各因子を構成する質問項目はつぎのようである。(なお、因子分析にもとづいた「変数」の作成は、大学2年次時点でのデータにもとづいてなされた。ほかの尺度についても同様である。)

- ① 勉強・学習活動(7問)……「語学」の授業に出席すること;「専門科目」の授業に出席すること;良い成績をとること;「一般教養」の授業に出席すること;「語学」の授業の予習・復習をすること;授業のノートの整理をすること;図書館の本や資料を利用すること。(質問項目の均質性—Cronbachの α 係数、以下同様—は、経済学部は.82,工学部は.77である)
- ② 交友・課外活動(6問)……クラブの活動に参加すること;上級生と親しくなること;OBや先輩と知りあいになること;クラブ内でリーダーシップをとること;上級生や先輩に授業の内容や先生の評判などについて聞くこと;身体をきたえること。(質問項目の均質性は、経済学部は.85,工学部は.83である)

●従属変数

表1のうち、上記2変数以外の変数が従属変数の扱いをうける。前述したように、4年間の大学生活における学生自身の変容が、ひとつは大学生活そのものへの適応と同化に関わる側面から、もうひとつは大学卒業後の社会的および職業的生活に結びつくと考えられる側面から捉えられた。それぞれの側面に含まれる変数は以下のものである。

(A) 大学生活への適応・同化に関わる側面

① 自己イメージ

「自己イメージ」では、大学組織における成員のひとりとしての自分に

表1 変 数 一 覧

変 数	予備観察	本 観 察			
	1974年 6~7月	1975年 1~2月	1976年 1~2月	1977年 1~2月	1978年 1~2月
● 大学生生活の過ごし方					
「勉学・学習」活動(7)	D	×	×	×	×
「交友・課外」活動(6)	D	×	×	×	×
● 大学生生活への適応に関わる側面					
1. 自己イメージ					
洗練性(5)	D	×	×	×	×
積極性(6)	D	×	×	×	×
勤勉性(4)	D	×	×	×	×
2. 大学生生活への満足度					
研究・教育システム(6)	D	×	×	×	×
対人・交友関係(5)	D	×	×	×	×
3. 大学組織への適合・同化度					
大学への一体感(1)	D	×	×	×	×
塾生らしさの増進(1)	D	×	×	×	×
将来へのみとおし(1)	D	×	×	×	×
4. 大学生生活上での諸問題(生活への障害度)					
「大学システム」の不備・不充実(8)	D	×	×	×	×
「対人的ネットワーク」からの乖離(6)	D	×	×	×	×
「大学生生活」の空疎感(6)	D	×	×	×	×
5. 学業成績		×	×	×	×
● 社会的・職業的生活への準備に関わる側面					
1. 社会的価値態度					
「伝統的性役割」の維持(6)			D	×	×
「社会的秩序」への従属(6)			D	×	×
2. 職業生活志向性					
「組織内上昇・安定」志向(6)		D	×	×	×
「自己実現・自律」志向(6)		D	×	×	×
3. 大学卒業後のキャリア展望(選択可能性)					
一流企業就職→社長(1)		D	×	×	
就職せず→自由業・タレント(1)		D	×	×	
外国留学→国際人(1)		D	×	×	
就職→サラリーマン(1)		D	×	×	
大学院進学→研究者・スペシャリスト(1)		D	×	×	
主義・信条重視→社会運動家(1)		D	×	×	
家業継承または自営→事業家(1)		D	×	×	
官公庁就職→政治家(1)		D	×	×	
4. 大学生生活と卒業後キャリアとの関連性					
良い成績をおさめること(1)		D	×	×	
クラブ・課外活動(1)		D	×	×	

注1：D印はその観察時点の間に「質問紙」などの測定方法が検討・開発されたことを意味する。

2：×印は資料が収集されたことを意味する。

3：()内の数字は、各因子を構成する質問項目数を示す。

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

対する、自己の認知をきいている。自己イメージの健全な形成・発達は、大学生活における自己の確立と密接な関連をもっていると考えられる。

「自己イメージ」を尋ねた20の質問項目は、因子分析によって「洗練性」、「積極性」、「勤勉性」の3尺度に再構成された。それぞれの尺度を構成する質問項目は次のとおりである。

- 1) 洗練性 (5問) ……スマートな—イカサない; あかぬけしない—洗練された; カッコ良い—カッコ悪い; 都会的な—田舎っぽい; ヤボな—ナウな。(質問項目の均質性は、経済学部は .92, 工学部は .91 である)
- 2) 積極性 (6問) ……活発な—無気力な; 消極的な—積極的な; 主体性のない—主体性のある; 特徴のない—個性豊かな; 強い—弱い; ひくつな—おおらかな。(質問項目の均質性は、経済学部は .80, 工学部は .82 である)
- 3) 勤勉性 (4問) ……勤勉な—怠惰な; 不まじめな—まじめな; 根気のない—根気のある; 用心深い—軽卒な。(質問項目の均質性は、経済学部は .72, 工学部は .67 である)

② 大学生活への満足度

15の質問項目を通して、現実に進行している大学生活のさまざまな側面に対する主観的な満足感を問題としている。因子分析の結果、2つの因子が抽出された。それぞれの尺度を構成する質問項目は次のとおりである。

- 1) 研究・教育システム (6問) ……自分の学問上での進歩の度合い; 語学や専門の講義の内容; 先生の学生に対するあり方・かかわり方; 自分の学業成績; 先生との個人的接触の機会; 自分のいる学部・学科のカリキュラムのあり方・構成。(質問項目の均質性は、経済学部は .78, 工学部は .73 である)
- 2) 対人・交友関係 (5問) ……「人間関係」を深める機会; 「慶応大学」というもの一般; 塾内での友人関係; クラブ・サークルなどでの課外活動; 「社会人」として成長するための経験を得る機会。(質問項目の均質性は、経済学部は .74, 工学部は .75 である)

③ 大学組織への適合・同化度

この質問項目は、大学生活における適応・同化の状況を大学組織における成員性の獲得という観点から捉えようとしたものである。すなわち、(1)

大学組織への同一化（大学への一体感：7点尺度）(2)大学組織内の集団への同一化（塾生らしさの増進：7点尺度）および(3)大学組織に所属していることの時間的展望（将来へのみとおし：4点尺度）の3点について、それぞれ単一項目（one-item variable）で測定されている。

④ 大学生活上での諸問題（生活への障害度）

大学生活における適応・同化は、学生が大学生活を送る上でどのような問題に遭遇するかという観点からも明らかにされる。ここではとくに、「大学生活への障害の度合い」という点に着目してデータを収集した。35の質問項目が因子分析によって、以下の3つの尺度に縮約化された。

- 1) 「大学システム」の不備・不充実（8問）……大学当局に新しいものを取り入れる柔軟さや決断がない；熱意のない先生が多い；大学の厚生施設（食堂やスポーツ施設など）が整っていない；カリキュラムが充実していない；都会での生活費が高すぎる；授業料が高い；皆の溜り場がない；大学の勉学に関する設備が整っていない。（質問項目の均質性は、経済学部は .79, 工学部は .78 である）
- 2) 「対人的ネットワーク」からの乖離（6問）……勉強する気のないクラスメートが多い；大学が都会にあるので何となく落ち着かない；自分は慶応にむいていないと思う；塾内出身者が自分たちだけで固りすぎている；クラスでのつきあいが表面的で冷たい；皆が派手でつきあいかねる。（質問項目の均質性は、経済学部は .76, 工学部は .79 である）
- 3) 「大学生活」の空疎感（6問）……何となく生活にはりがない；自分が何となく時間を浪費している；自分の学生生活に目標がない；将来が不安で仕方がない；勉強していることが将来あまり役立ちそうもない；入ってきた学部があまり気に入らない。（質問項目の均質性は、経済学部は .85, 工学部は .82 である）

⑤ 学業成績

大学生活における適応・同化のひとつの客観的指標として、各学年での学業成績を問題とした。当該学年に履習したすべての科目の学年成績（A・B・C・Dの4段階評価）を3点から0点のかたちで数量化し、平均的学業成績（grade point average）を算出した。

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

(B) 社会的・職業的生活への準備に関わる側面

① 社会的価値態度

青年期には経済的・職業的独立に先立って、社会観・人生観の確立をなしとげることが期待されている。40の質問項目により社会的価値態度の形成の様相を捉えようとした。ここでは因子分析により抽出された3尺度のうち、次の2つを使用する。

- 1) 「伝統的性役割」の維持(6問)……夫は外に出て働き、妻は家庭で家事をするという形が夫婦にとって望ましい;結婚した後でも、女性は積極的に外へ出て働くようにすべきである;男が炊事、洗濯、掃除など家事労働をすることは好ましくない;女性にも男性と同じ仕事を与えるべきである;子供を育てることは母親の仕事で他人にまかせるべきでない;物事を考えたりまとめたりする能力には生まれつき男女の差がある。(質問項目の均質性は、経済学部は.84,工学部は.66である)
- 2) 「社会的秩序」への従属(6問)……人が幸福になるためには秩序正しい社会をつくる必要がある;人々が調和のとれた生活をするためには、社会的規則が不可欠である;人が幸福になるためには他人と仲良く暮す必要がある;西欧の文化を取り入れるよりも自国の文化の維持、発展を重視すべきである;人が幸福になるためには、経済的に豊かになる必要がある;人は自然を征服するよりも、自然に従うべきである。(質問項目の均質性は、経済学部は.58,工学部は.72である)

② 職業生活志向性

職業や組織に対して個人が抱く価値意識は、職業選択および職業的適応に影響を与える要因のひとつである。28の質問項目により職業生活への志向性をきいた。ここでは因子分析により抽出された3尺度のうち、次の2つを使用する。

- 1) 「組織内上昇・安定」志向(6問)……まず会社組織を信頼し、与えられた仕事で最善をつくす;企業や組織の中で生きていくからには、昇進・出世しなければ意味がない;目新しいことをするよりは、とりあえず言われたことをきちんとやるべきだ;「寄らば大樹の陰」というように大組織で働く方が望ましいことは明らかだ;大企業・大組織に入っこそ、はじめて私の考えている満足のい

く仕事ができる；与えられた仕事をまじめにやっていたら、「良い仕事」が必ずまわってくる。（質問項目の均質性は、経済学部は .79, 工学部は .75 である）

- 2) 「自己実現・自律」志向（6問）……自分の知識やアイデアにもとづいて、仕事のやり方をどんどん変えていく；大組織に入れば一生こきつかわれるだけだ。それよりも中小規模の組織で、自分の力を試してみる方が面白い；組織や上司の命ずることはかならずしも正しくはない。自分の仕事は自分の判断にもとづいて遂行したい；自分のことは自分でできり開いていく。仕事が面白くなかったら、当然転職を与える；会社や組織の知名度・規模など問題にしない。「将来、自分が何ができるか」ということが最大の問題だ；組織内では、慶応卒の肩がきなど大した役にはたたない。（質問項目の均質性は、経済学部は .70, 工学部は .83 である）

③ 大学卒業後のキャリア展望（選択可能性）

この質問項目では、職業選択に直接的な関連をもつと考えられる、さまざまな職業（キャリア）に対する自分の選択可能性について、いかに認知しているかをきいた。次にあげる8つのキャリア展望に関して、それぞれ7点尺度で「実際に選ぶことになるであろう見込み」を尋ねた。

- 1) 一流大企業に就職し、将来、その組織で指導的立場を確立すること（一流企業就職→エリート社員→社長、といったキャリア展望）
- 2) 自分のセンスや趣味を洗練し、将来、それで生計を立てていくこと（就職せず→センス・アイデア洗練→自由業・タレント、といったキャリア展望）
- 3) 外国に留学し、視野を拡大するなどして、将来、国際的に活躍すること（外国留学→視野拡大→国際人、といったキャリア展望）
- 4) とにかく、どこかに就職し、きちんと仕事をやりながら、世間並の生活を設計していくこと（就職→サラリーマン→安定した人生設計、といったキャリア展望）
- 5) 大学院に進み、さらに深く勉強し、将来、専門領域で自分らしい仕事をしていくこと（大学院進学→知識・技能修得→研究者・スペシャリスト、といったキャリア展望）
- 6) 自分の主義・信条にしたがい、かりにそれが反体制的であったとしても、それを貫ぬいた生活をきりひらいていくこと（主義・信条重視→世の為・人の為→社会運動家、といったキャリア展望）
- 7) 家の仕事を引き継ぐか、あるいは、自分で事業を興して、さらにそのビジネス

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

を拡げていくこと（家業継承または自営→ビジネス拡張→事業家，といったキャリア展望）

8) 一流官公庁に入り，将来，国家的な見地からリーダーシップを発揮していくこと（官公庁就職→エリート官僚→政治家，といったキャリア展望）

④ 大学生活と卒業後キャリアとの関連性

大学卒業後に選びたいと考えているキャリアを実現するためには，大学生活のなかでどのような活動にとりくむことがもっとも役立つと考えているかについて，期待理論にもとづいて質問がなされた。すなわち「課内」活動（一生けんめい勉強し，「良い成績をおさめる」こと）と「課外」活動（クラブ・サークルなどの課外活動に参加し，「上級生や先輩と親しく接する」こと）のそれぞれについて，

- 1) 遂行可能性（それぞれの活動を本気でやるとしたら，あなたが，それを実際に実現・達成できる「見込み」または「可能性」），
- 2) 道具性（「それぞれの活動の実現・達成」が，あなたの希望する，または魅力を感じる「卒業後の将来の方向・生き方」をあなたが実現・達成していくのに，実際に助けとなってくれる，または役立ってくれる，その度合い）

の二点が尋ねられ，それらの積をもって大学生活と卒業後キャリア実現との関連性の指標とした。

(2) 分 析

分析は継時的分散分析 (repeated measure of ANOVA) を用いて行われる。すなわち，前述した「1年次での勉学・学習活動」と「1年次での交友・課外活動」，それに加えるに「学年」（時間）の3変数が，分散分析において独立変数として配置される。このことは，大学1年次における「課内」活動と「課外」活動への関わりがありようが，それ以降4年間にわたる大学生活を通して学生の変容にいかなる影響を与えているのかを検討する，いわゆる予測的な分析戦略 (predictive design) を採用していることを意味している。

分析の実際的な段どりは以下のようなものである。学生各人の大学1年次にお

ける「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」それぞれへの関わり方に着目して、学生たちを High 群と Low 群とに二分していく。結果的にこの操作は、図 1 に示したごとくの 4 つのグループをつくることになる。これらのそれぞれのグループが従属変数のうえに引き起こす変動を「時間」(学年) をかみ合わせて吟味していくわけである。

経済学部		「交友・課外」活動		計	工学部		「交友・課外」活動		計
		高い	低い				高い	低い	
「勉学・学習」活動	高い	23人	21人	44人	「勉学・学習」活動	高い	26人	23人	49人
	低い	21人	23人	44人		低い	23人	28人	51人
計		44人	44人	88人	計		49人	51人	100人

図 1. “大学 1 年次” における「勉学・学習」活動と「交友・課外」活動への関わり方にもとづくグループ分けの結果

3. 分析の結果

(1) 独立変数の分類基準としての有効性

継時的分散分析を適用する上で、まず検討しておかなければならない事項が 2 つある。

まず第 1 は、本稿での分析目的から言って「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」は相互に独立でなければならない。実際にはどうであろうか。両活動の関連の程度を相関係数に着目して吟味してみたのが表 2 である。それによれば、経済学部・工学部ともに「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」は相互に独立の事象としてみてよいことがわかる。

次に第 2 は、「1 年次での勉学・学習活動」と「1 年次での交友・課外

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

表2 「勉学・学習」活動と「交友・課外」活動との関連（相関係数）

		「勉学・学習」活動			
		1年	2年	3年	4年
「交友・課外」活動	1年	.05	.26*	.12	.10
	2年	-.04	.11	.20	.16
	3年	.04	.08	.13	.20
	4年	-.05	-.00	.15	.18

注1: *.....5%水準で有意.

2: 対角線の上側は工学部 (N=100), 下側は経済学部 (N=88).

活動」とにもとづいたグループ分けが、大学生活の4年間を通じて有効であるのか否かが問題とされなければならない。表3と図2に示したように、経済学部の場合、「1年次での勉学・学習活動」にもとづいて区分された2つのグループの「勉学・学習活動」の4年間の推移をみると、両グループは学年をすすめるにつれて次第に収斂する傾向にあるものの ($p < .001$), グループ分けとしては一応有効な水準を保っていることが明らかである ($p < .001$)。また、「1年次での交友・課外活動」についても、表4と図3にみるように両グループの差異は4年間を通じて維持されているといえる ($p < .001$)。

工学部の場合も経済学部にみた結果とほとんど類似している。すなわち、表3と図4にみるように「1年次での勉学・学習活動」にもとづいて区分された2つのグループは、その差異 ($p < .001$) が学年の進行とともに収斂する気配をみせてはいるが ($p < .001$), グループ分けとしては有効であることがわかる。また「1年次での交友・課外活動」についても、

表 3 分類基準としての有効性 (「勉学・学習」活動)

学 部	平 均 値										有 意 性 水 準							
	学 年 (T)		1 年次での「勉学・学習」活動 (S)								S	T	S×T					
	1 年	2 年	1 年	2 年	3 年	4 年	全 体	H	L									
経済学部	4.13	4.09	3.36	2.68	3.56	4.94	3.32	4.75	3.44	3.70	3.01	2.94	2.42	4.08	3.04	.001	.001	.001
工学部	3.96	4.09	3.27	2.82	3.53	4.69	3.25	4.59	3.62	3.52	3.03	3.12	2.54	3.98	3.11	.001	.001	.001

注: 経済学部 (N=88): High 群 (H) 44人, Low 群 (L) 44人。
工学部 (N=100): High 群 (H) 49人, Low 群 (L) 51人。

表 4 分類基準としての有効性 (「交友・課外」活動)

学 部	平 均 値										有 意 性 水 準							
	学 年 (T)		1 年次での「交友・課外」活動 (E)								E	T	E×T					
	1 年	2 年	1 年	2 年	3 年	4 年	全 体	H	L									
経済学部	3.78	3.96	4.05	3.53	3.83	4.87	2.70	4.89	3.04	4.74	3.35	4.17	2.89	4.67	2.99	.001	.001	.001
工学部	3.58	3.64	3.74	3.57	3.64	4.66	2.55	4.50	2.82	4.42	3.08	4.02	3.15	4.40	2.90	.001	.359	.001

注: 経済学部 (N=88): High 群 (H) 44人, Low 群 (L) 44人。
工学部 (N=100): High 群 (H) 49人, Low 群 (L) 51人。

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

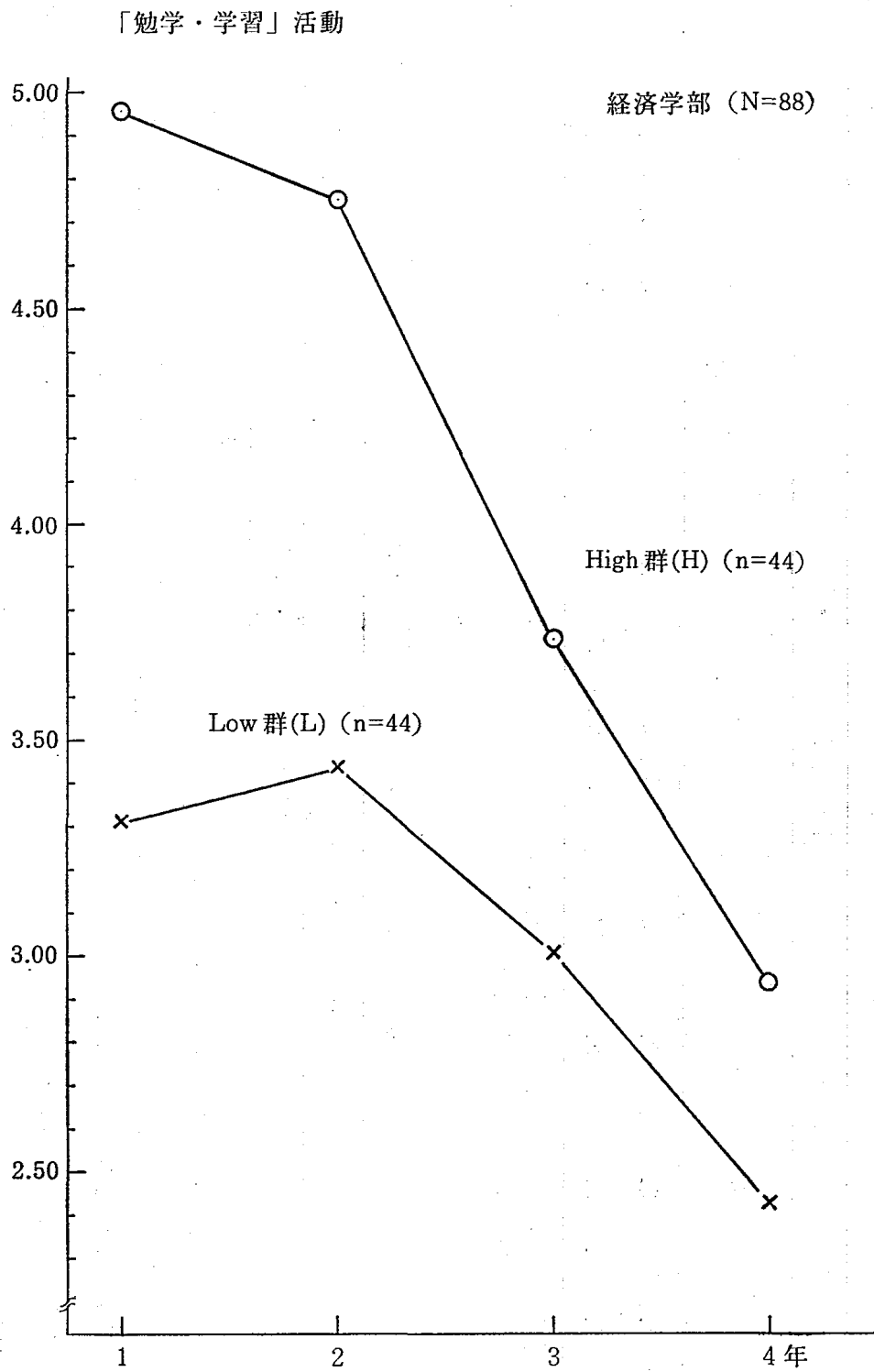


図2 1年次での「勉学・学習」活動にもとづいて区分された2つのグループの4年間の推移 (経済学部)

「交友・課外」活動

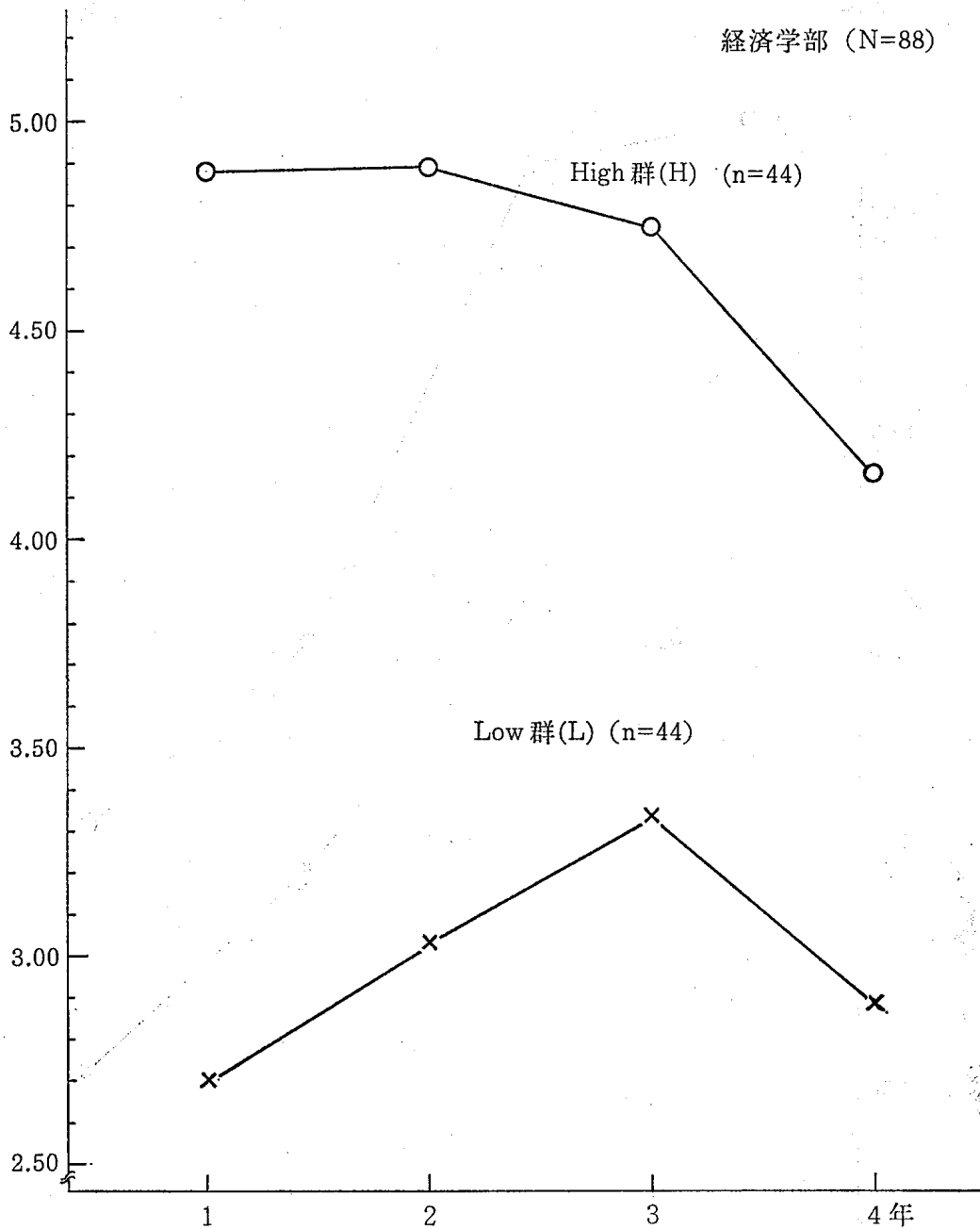


図3 1年次での「交友・課外」活動にもとづいて区分された2つのグループの4年間の推移 (経済学部)

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

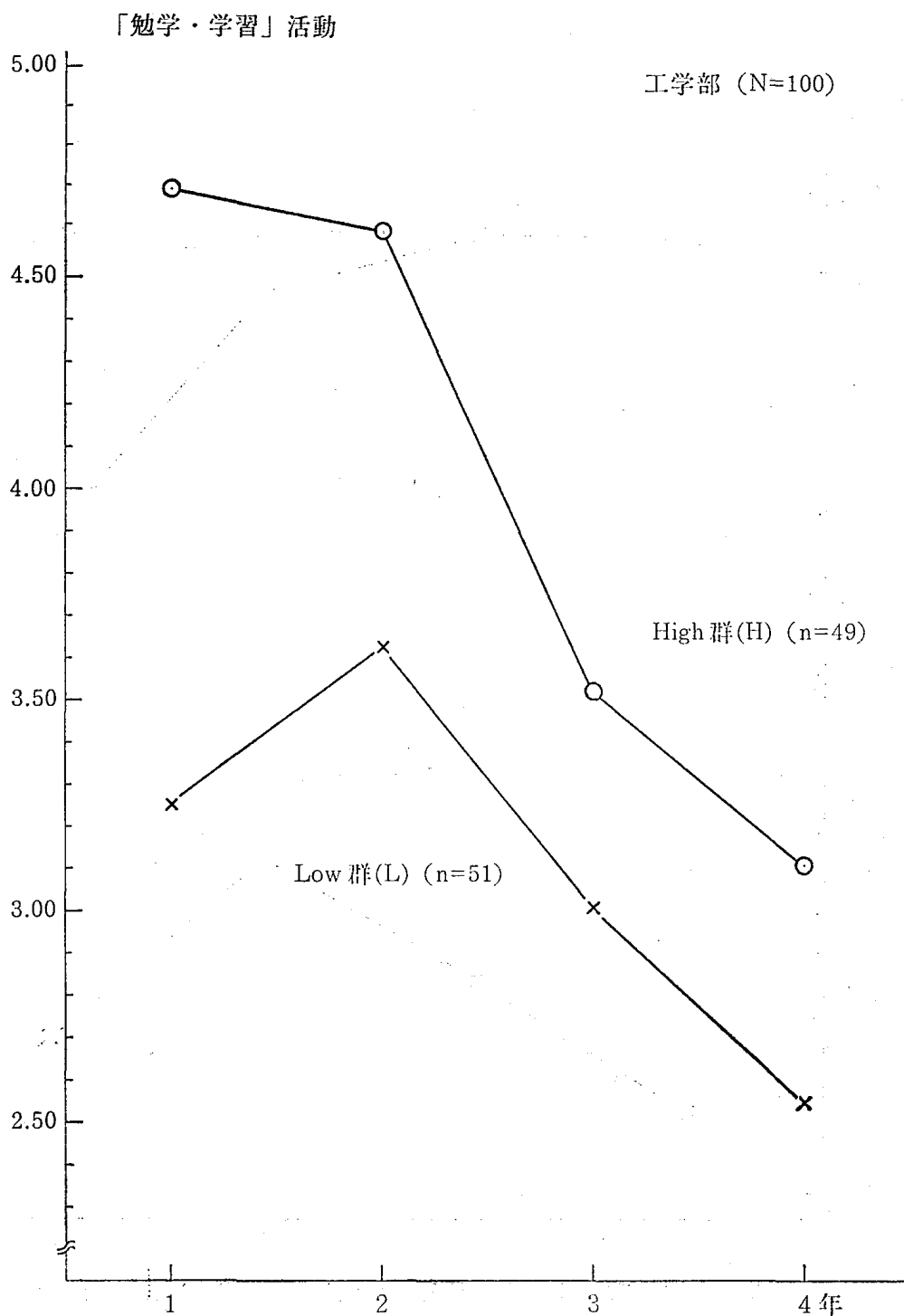


図4 1年次での「勉学・学習」活動にもとづいて区分された2つのグループ (工学部)

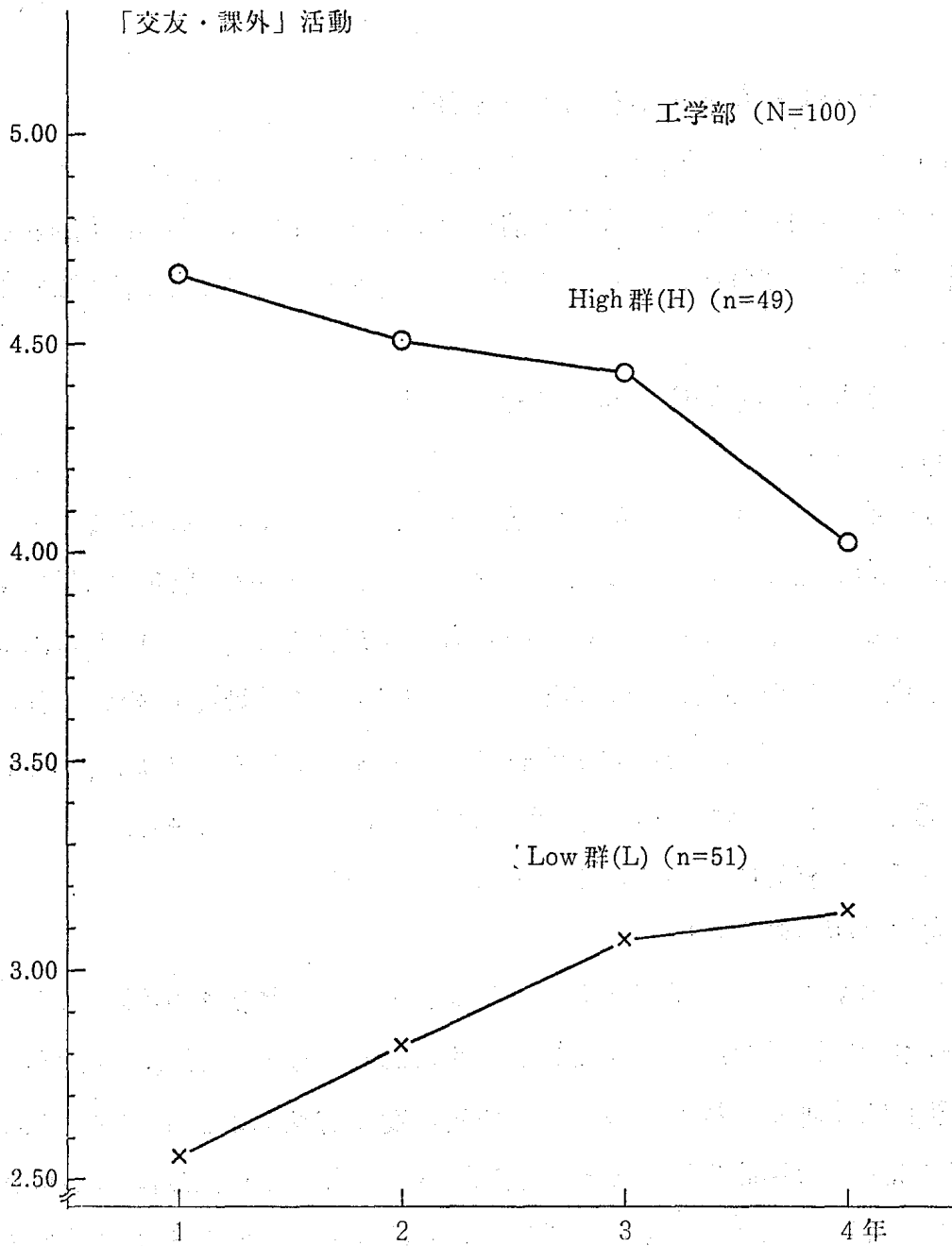


図5 1年次での「交友・課外」活動にもとづいて区分された2つのグループの4年間の推移 (工学部)

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

表4と図5に明らかなように、両グループの差異 ($p < .001$) は4年間を通じて維持されているとみなせる。

(2) 独立変数が従属変数にもたらす効果

「1年次での勉学・学習活動」、「1年次での交友・課外活動」および「学年」の3つの独立変数が、大学生活への適応・同化ならびに職業的社会化に関わる諸側面で学生にいかなる影響を与えているかを、以下に順を追って検討していこう。

(A) 大学生活への適応・同化に関わる側面

① 自己イメージ

表5に明らかなように、経済学部と工学部とでは両活動の影響力のパターンは微妙な違いをみせている。つまり、「交友・課外活動」は経済学部では「洗練性」イメージについてのみ有意な影響力をもっているのに対し ($p < .035$)、工学部では「洗練性」、「積極性」、「勤勉性」のいずれのイメージについても有意な影響が現われている (順に $p < .002$, $p < .001$, $p < .030$)。一方、「勉学・学習活動」は両学部ともに、「勤勉性」イメージについてのみ有意に効いている (ともに $p < .001$)。

② 大学生活への満足度

表6に示すように、経済学部と工学部ともに、両活動の影響力のパターンは基本的に同じであるとみなせる。すなわち、経済学部では「勉学・学習活動」は「研究・教育システム」の満足度に有意に影響を与えており ($p < .003$)、工学部でも有意とは言えないまでもそうした傾向が看取される ($p < .113$)。また、「交友・課外活動」は経済・工学部ともに「対人・交友関係」の満足度に対して有意な影響力をもっている (順に $p < .005$, $p < .004$)。

③ 大学組織への適合・同化度

表7からわかるように、両活動の影響力のパターンは経済学部も工学部

表 5 継続的分散分析の結果：① 自己イメージ

	平 均 値		有 意 性 水 準										
	1年次での 「勉学・学習」 活動 (S)		学 年 (T)										
	High	Low	1年	2年	3年	4年							
● 経 済 部													
洗 練 性	4.31	4.40	4.52	4.19	4.29	4.28	4.36	4.49	—	.035	.035	—	
積 極 性	4.54	4.42	4.57	4.39	4.12	4.33	4.38	4.85	—	—	.001	(.066)	
勤 勉 性	4.77	4.07	4.51	4.32	4.21	4.43	4.45	4.57	.001	—	—	.009	—
● 工 学 部													
洗 練 性	4.37	4.28	4.58	4.08	4.26	4.28	4.31	4.44	—	.002	(.087)	—	
積 極 性	4.41	4.26	4.63	4.04	4.16	4.26	4.32	4.58	—	.001	.001	—	
勤 勉 性	4.54	4.02	4.43	4.12	4.14	4.24	4.21	4.51	.001	.030	.001	—	

注 1：有意性水準 (F 値の検定結果) は、5%水準までを記載、それ以外は一。但し、() 内の数値は参考のため。
 2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

3：経済学部 (N=88)：「1年次での勉学・学習活動」High群44人, Low群44人;
 「1年次での交友・課外活動」High群44人, Low群44人。

工学部 (N=100)：「1年次での勉学・学習活動」High群49人, Low群51人;
 「1年次での交友・課外活動」High群49人, Low群51人。

以上のグループ分けは、表 6 から表 13 まで同様である。

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

表6 継続的分散分析の結果：② 大学生活への満足度

	平均値				有意性水準							
	1年次での 「勉学・学習」 活動 (S)		1年次での 「交友・課外」 活動 (E)		学 年 (T)		S × E					
	High	Low	High	Low	1年	2年	3年	4年				
● 経 済 学 部												
研究・教育システム	3.77	3.34	3.57	3.54	3.35	3.42	3.58	3.88	.003	—	.001	—
対人・交友関係	4.44	4.37	4.61	4.20	4.14	4.26	4.46	4.75	—	.005	.001	—
● 工 学 部												
研究・教育システム	3.65	3.46	3.59	3.52	3.27	3.43	3.52	3.98	(.113)	—	.001	—
対人・交友関係	4.21	4.33	4.47	4.08	4.25	4.16	4.22	4.46	—	.004	.002	—

注1：有意性水準 (F値の検定結果) は、5%水準までを記載、それ以外は一。但し、() 内の数値は参考のため。
 2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

表 7 継時的分散分析の結果：③ 大学組織への適合・同化度

	平 均 値				有 意 性 水 準				
	1年次での 「勉学・学習」 活動 (S)		1年次での 「交友・課外」 活動 (E)		学 年 (T)		S × E		
	High	Low	High	Low	1年	2年	3年	4年	
● 経 済 学 部									
大学への一体感	4.72	4.51	4.84	4.39	4.34	4.43	4.59	5.09	— .048 .001 —
塾生らしさの増進	4.76	4.32	4.84	4.24	4.25	4.53	4.57	4.81	(.091) .020 .001 —
将来へのみとおし	2.51	2.19	2.39	2.31	2.11	2.26	2.39	2.64	.008 — .001 —
● 工 学 部									
大学への一体感	4.60	4.42	4.83	4.20	4.28	4.30	4.46	5.00	— .001 .001 —
塾生らしさの増進	4.56	4.36	4.96	4.00	4.31	4.36	4.46	4.71	— .001 .006 —
将来へのみとおし	2.43	2.22	2.40	2.25	2.09	2.32	2.23	2.65	(.054) — .001 —

注 1：有意性水準 (F 値の検定結果) は, 5%水準までを記載し, それ以外は一. 但し, () 内の数値は参考のため.

2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略.

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

も基本的に同じであるといえる。すなわち、経済学部で「勉学・学習活動」が「将来へのみとおし」に有意な影響を与えているように ($p < .008$), 工学部でも経済学部にもみられたほど顕著ではないものの同様の結果を示している ($p < .054$)。 「交友・課外活動」についても、経済・工学部の両学部とも基本的に同じで、「大学への一体感」(順に $p < .048$, $p < .001$), 「塾生らしさの増進」($p < .020$, $p < .001$) に有意な影響力をもっている。

④ 大学生活上での諸問題 (生活への障害度)

表8に結果が示される。ここには今までみてきた結果といくぶん異なる様相が展開されている。すなわち、経済学部で「勉学・学習活動」が「大学生活への空虚感」を有意に低める影響を与えていることを除けば ($p < .025$), 両学部においてそれぞれの活動は大学生活上の諸問題のありようと何らの有意味な関係をもっていない、ということができる。

⑤ 学業成績

表9に示すように、経済学部、工学部ともに「1年次での勉学・学習活動」は学業成績を有意に規定している (ともに $p < .001$)。しかし、経済学部では「交友・課外活動」に大学一年次においてより深く関わっているグループの方が学業成績が有意に低い ($p < .044$) という結果がみられる。

表5から表9に示されるように、経済学部、工学部ともに、両活動の交互作用効果は一部の項目 (経済学部の「大学システムの不備・不充実」のケースで $p < .032$, 詳しくは表8を参照) を除けば、全く有意には効いていない。

また、表5から表9にみるように、経済学部と工学部ともに基本的な傾向として、学年がすすむにつれて大学生活に学生が適応・同化していくようすがみてとれる。たとえば、両学部において大学生活への満足感や適合・同化度が高まり (ともに1%水準で有意), 大学生活上の諸問題が解消していく (すべて $p < .001$) というパターンである。

表 8 継時的分散分析の結果：④ 大学生生活上での諸問題（生活への障害度）

	平 均 値				有 意 性 水 準							
	1年次での 「勉学・学習」 活動 (S)		1年次での 「交友・課外」 活動 (E)		学 年 (T)	S	E	T	S×E			
	High	Low	High	Low						1年	2年	3年
● 経 済 学 部												
「大学システム」の不備・不充実	3.64	3.80	3.75	3.69	3.85	3.82	3.75	3.46	—	—	.001	.032
「対人的ネットワーク」からの乖離	2.68	2.87	2.87	2.67	2.95	2.86	2.77	2.52	—	—	.001	—
「大学生生活」の空疎感	3.48	3.90	3.57	3.81	3.94	3.77	3.70	3.34	.025	—	.001	—
● 工 学 部												
「大学システム」の不備・不充実	4.01	3.79	3.86	3.94	4.09	4.00	4.00	3.51	—	—	.001	—
「対人的ネットワーク」からの乖離	2.90	2.77	2.79	2.87	3.04	2.99	2.85	2.44	—	—	.001	—
「大学生生活」の空疎感	3.74	3.95	3.73	3.95	4.13	4.01	4.02	3.21	—	—	.001	—

注 1：有意性水準（F 値の検定結果）は、5%水準までを記載し、それ以外は一。但し、（ ）内の数値は参考のため。

2：学年（T）との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

表9 継続的分散分析の結果：⑤ 学業成績

	平 均 値		学 年 (T)				有 意 性 水 準					
	1年次での 「勉学・学習」 活動 (S)		1年次での 「交友・課外」 活動 (E)				S	E	T	S×E		
	High	Low	High	Low	1年	2年					3年	4年
経 済 学 部	2.50	2.27	2.34	2.43	2.33	2.39	2.52	2.28	.001	.044	.001	—
工 学 部	2.43	2.25	2.34	2.33	2.25	2.25	2.31	2.54	.001	—	.001	—

注1：有意性水準 (F値の検定結果) は、5%水準までを記載し、それ以外は一. 但し、() 内の数値は参考のため。
 注2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

表10 継続的分散分析の結果：⑥ 社会的価値態度

	平 均 値		学 年 (T)				有 意 性 水 準					
	1年次での 「勉学・学習」 活動 (S)		1年次での 「交友・課外」 活動 (E)				S	E	T	S×E		
	High	Low	High	Low	High	Low					3年	4年
● 経 済 学 部												
「伝統的性役割」の維持	3.37	3.57	3.59	3.35	3.43	3.43	3.51		—	—	—	—
「社会的秩序」への従属	3.92	3.92	3.94	3.90	3.84	3.84	4.01		—	—	.001	—
● 工 学 部												
「伝統的性役割」の維持	3.49	3.56	3.62	3.43	3.52	3.52	3.53		—	(.083)	—	—
「社会的秩序」への従属	3.89	3.98	3.93	3.94	3.94	3.94	3.93		—	—	—	—

注1：有意性水準 (F値の検定結果) は、5%水準までを記載し、それ以外は一. 但し、() 内の数値は参考のため。
 注2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

(B) 社会的・職業的生活への準備に関する側面

① 社会的価値態度

表10に示すように、経済学部と工学部ともに両活動は社会的価値態度の側面で、学生に有意な影響を与えるようすはみられない。

② 職業生活志向性

表11にみるとおり、「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」の影響力のパターンは両学部で全く異なっている。すなわち、工学部ではいずれの活動も何の効果ももちえないのに対して、経済学部では「勉学・学習活動」により深く関わることで「自己実現・自律」志向を有意に低める方向で働き ($p < .027$)、「交友・課外活動」については「自己実現・自律」志向を有意に低める ($p < .041$) とともに「組織内上昇・安定」志向を有意に高めている ($p < .002$)。

③ 大学卒業後のキャリア展望 (選択可能性)

表12に明らかなように、両活動の影響力のパターンを経済学部と工学部とで比較すると、共通点と相違点がある。共通点としては、両学部ともに「交友・課外活動」が有意な影響力をもっていることである。とくに、「一流企業就職→社長」(順に $p < .002$, $p < .001$)、「就職→サラリーマン」(順に $p < .035$, $p < .001$) へのキャリア展望においては共通している。一方、相違点としては「勉学・学習活動」が工学部では特徴的に有意な影響を与えていることである。とくに、「大学院進学→研究者」($p < .001$)、「外国留学→国際人」($p < .002$)、「一流企業就職→社長」($p < .009$) のキャリア展望においてそれがみられる。

④ 大学生活と卒業後キャリアとの関連性

表13に示すように、経済学部と工学部とに全く同じパターンがみられる。「勉学・学習活動」と「良い成績をおさめること」は有意に (5%水準)に関連しており、「交友・課外活動」は「クラブ・課外活動」と有意に (0.1%水準)に関連している。さらに特徴的なことは「良い成績をお

表11 継時的分散分析の結果：⑦ 職業生活志向性

	平均値				有意性水準			
	1年次での「勉学・学習」活動 (S)		1年次での「交友・課外」活動 (E)		S	E	T	S×E
	High	Low	High	Low				
● 経済学部								
「組織内上昇・安定」志向	4.42	4.23	4.56	4.09	4.12	4.32	4.53	— .002 .001 —
「自己実現・自律」志向	4.39	4.68	4.40	4.67	4.58	4.44	4.59	.027 .041 — —
● 工学部								
「組織内上昇・安定」志向	4.28	4.27	4.32	4.23	4.15	4.25	4.43	— — .001 —
「自己実現・自律」志向	4.44	4.46	4.44	4.47	4.47	4.53	4.36	— — (.058) —

注1：有意性水準 (F 値の検定結果) は、5%水準までを記載し、それ以外は—。但し、() 内の数値は参考のため。
 2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

表12 継時的分散分析の結果：⑧ 大学卒業後のキャリア展望（選択可能性）

	平 均 値						有 意 性 水 準				
	1年次での「勉学・学習」活動 (S)		1年次での「交友・課外」活動 (E)		学年 (T)		S	E	T	S×E	
	High	Low	High	Low	1年	2年					3年
● 経 済 学 部											
一流企業就職→社長	4.10	3.89	4.38	3.61	3.94	4.11	3.93	—	.002	—	—
就職せず→自由業・タレント	3.25	3.75	3.46	3.53	3.93	3.38	3.19	.013	—	.001	—
外国留学→国際人	3.53	3.54	3.56	3.51	3.41	3.75	3.44	—	—	.036	—
就職→サラリーマン	4.75	4.55	4.87	4.43	4.22	4.86	4.88	—	.035	.001	—
大学院進学→研究者・スペシャリスト	3.41	3.21	3.27	3.34	3.98	3.15	2.80	—	—	.001	—
主義・信条重視→社会運動家	2.80	3.13	3.02	2.92	3.51	2.88	2.51	—	—	.001	—
家業継承または自営→事業家	3.11	3.27	3.33	3.05	2.76	3.53	3.27	—	—	.001	—
官公庁就職→政治家	3.06	2.64	3.12	2.58	2.85	3.01	2.69	(.068)	.020	—	—
● 工 学 部											
一流企業就職→社長	3.98	3.50	4.07	3.42	3.67	3.76	3.77	.009	.001	—	—
就職せず→自由業・タレント	3.45	3.45	3.56	3.35	3.86	3.50	2.99	—	—	.001	(.106)
外国留学→国際人	3.69	3.09	3.55	3.23	3.18	3.72	3.26	.002	(.076)	.002	—
就職→サラリーマン	4.74	4.56	4.94	4.37	4.06	4.89	4.99	—	.001	.001	—
大学院進学→研究者・スペシャリスト	4.38	3.75	4.32	3.80	3.99	4.33	3.85	.001	.005	.006	—
主義・信条重視→社会運動家	3.32	2.97	3.15	3.13	3.35	3.20	2.87	(.076)	—	.010	—
家業継承または自営→事業家	3.09	3.16	3.13	3.12	2.53	3.40	3.44	—	—	.001	—
官公庁就職→政治家	2.80	2.54	2.57	2.75	2.77	2.80	2.42	—	—	.043	—

注1：有意性水準（F値の検定結果）は、5%水準までを記載し、それ以外は—。但し、()内の数値は参考のため。
 2：学年（T）との交互作用効果はほとんどで有意ではなかったため省略。

表13 継時的分散分析の結果：⑨ 大学生生活と卒業後キャリアとの関連性

	平均値						有意性水準				
	1年次での「勉学・学習」活動 (S)		1年次での「交友・課外」活動 (E)		学年 (T)		S	E	T	S×E	
	High	Low	High	Low	1年	2年					3年
● 経済学部											
良い成績をおさめること	25.05	21.52	25.36	21.21	20.42	25.35	24.09	.031	.012	.001	—
クラブ・課外活動	24.22	23.21	29.07	18.36	19.57	26.47	25.11	—	.001	.001	—
● 工学部											
良い成績をおさめること	25.04	21.67	25.97	20.77	19.58	26.01	24.37	.018	.001	.001	—
クラブ・課外活動	23.34	22.75	27.84	18.43	18.60	26.57	23.95	—	.001	.001	—

注1：有意性水準 (F値の検定結果) は、5%水準までを記載し、それ以外は一。但し、() 内の数値は参考のため。

2：学年 (T) との交互作用効果はほとんど有意ではなかったため省略。

さめること」にも関連がみられることである（それぞれ $p < .012$, $p < .001$ ）。これは、大学1年次において「交友・課外活動」により深く関与するグループは、将来のキャリア実現との関連で「課内」活動と「課外」活動の両方に道具的な価値を見出していくことを示している。

表10から表13にみるように、両活動の交互作用効果は、両学部ともに全く見出されなかった。しかし、両学部ともにほとんどすべての従属変数に有意な「学年」の効果がみられる。この「学年」すなわち「時間」の影響力のパターンは、経済学部と工学部を比べるとき若干の異同を含むものの基本的な変化の方向は共通している。すなわち、学年をすすめるにつれて両学部ともにより現実的な方向で職業的社会化がすすんでいることである。たとえば、職業生活志向性について「組織内上昇・安定志向」が有意に高くなる（ともに $p < .001$ ）。大学卒業後のキャリア展望についても、「サラリーマン」が可能性のある職業として選ばれ（ともに0.1%水準で有意）、「自由業・タレント」（ともに0.1%水準で有意）、「社会運動家」（経済学部で $p < .001$, 工学部で $p < .010$ ）などの選択可能性が減少していくなどである。

一方、学部の違いを反映したと考えられる相違点には、経済学部では「社会的秩序への従属」が有意に高くなり（ $p < .001$ ）、工学部では「自己実現・自律志向」が低下する傾向がみてとれる（ $p < .058$ ）。

4. 考 察

本稿では、4年間の大学生活のなかで学生が「勉学・学習活動」および「交友・課外活動」のそれぞれに取り組むことによって、かれ自身の大学生活への適応・同化および社会的・職業的生活への準備という側面においてどのように影響を受けるのか、という点に関して、経済学部と工学部の場合について吟味してきた。これまで述べてきた分析結果を整理すると、

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

以下のように言うことができよう。

(1) 4年間の大学生活を通しての学生の変化

経済学部、工学部ともに、学年がすすむにつれて学生は大学生活へ次第に適応・同化していく。また、社会的・職業的生活への準備についても、より現実性が増すかたちで職業的社会化がすすむ。この事実は、しごくあたりまえのことかも知れない。問題は、この事実に対して「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」とが——とくに、大学1年次におけるそれぞれの活動への関与のありかたに着目した場合——、どういう関連をもってくるのか、ということである。

(2) 大学生活への適応と同化

「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」は、それぞれ独自のかたちで学生の大学生活への適応と同化を促進しており、その影響のありようは経済学部と工学部で非常によく類似していた。たとえば、「勉学・学習活動」は、自己の「勤勉性」イメージを強化し、学業成績を向上させ、「研究・教育システム」としての大学に対する満足度を増加させ、そして大学に在学していることについての「将来へのみとおし」を増大させていく方向で有意な影響を与えていた。一方、「交友・課外活動」は、自己の「洗練性」イメージを強化させ、「対人・交友関係」に対する満足度を増加させ、そして大学組織へのコミットメントを増大させる（「大学への一体感」と「塾生らしさの増進」）方向で有意に関連していた。

(3) 社会的・職業的生活への準備

職業的社会化については、大学生活への適応・同化に関わる側面にみられたような「勉学・学習活動」と「交友・課外活動」の特色ある、しかも学部に通じた影響力のパターンは見出されなかった。むしろ、それぞれの学部に通じている面と固有な面とが混在していた。

共通のパターンとしては、「交友・課外活動」の方が「勉学・学習活動」よりもより広い範囲の影響を学生に与えていた、ということがあげられ

る。とくにその影響は「大学卒業後のキャリア展望（選択可能性）」や「大学生活と卒業後キャリアとの関連性」のような現実的、具体的な側面において見出された。

一方、学部固有のパターンに着目すれば、次のようなことが指摘できる。価値意識の側面に対しては両活動の影響が余りみられなかったけれども、経済学部においては「職業生活志向性」に顕著な効果がみられた。つまり、「交友・課外活動」は「組織内上昇・安定」志向を強め「自己実現・自律」志向を弱めるような方向で影響をもっていた。また、工学部では「交友・課外活動」とともに「勉学・学習活動」も「大学卒業後のキャリア展望」に有意な影響関係がみられた。たとえば、「勉学・学習活動」への関与は「研究者・スペシャリスト」キャリアへの選択可能性を高める、といった関係がそうである。

以上の分析諸結果が示唆するところは何であろうか。おおよそ以下のときことが考えられてくる。

(1) 大学生活を構成している諸活動のうち「課内」活動と「課外」活動とが学生に対してもつ影響力のありよう、という観点から整理するならば、「文科系」キャリア・トラックの典型としての経済学部と「理工系」キャリア・トラックの典型としての工学部とは、若干の差異はみられるものの、基本的には同質の生活空間であるとみなしてよい。また、両学部ともに、「課内」活動（学生にとっての大学教育）は大学生活への適応と同化に関わる側面では学生に一定の影響を及ぼしているが、職業的社会化に関わる側面では実質的な影響力をもっていない、とみてよい。

これらの事実は、経済学部と工学部が専門的あるいは職業的教育システムとしては今や形骸化しつつあること、さらに言えば、実質的な“教養”学部化⁽²⁾（天野，1980）が進行しているかもしれないこと、などを推測させる。

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

(2) 分析の結果は、それを全体としてみた場合、「課内」活動よりもむしろ「課外」活動のもつ広範な影響力を明らかにしている。とくに、「課外」活動は職業的社会化に関わる側面で特徴的な役割を果している。これまでわたしたちは、大学の第一義的な機能として「課内」活動（教育）を、副次的なものとして「課外」活動を捉えるのが一般的であったといえよう。しかし、今回の分析結果はこうした考え方に鋭く見直しを迫っているように思われる。

Miller and Jones (1981) は、「大学はカリキュラム以上のものであり、教育はクラスの内においても外においても多様なかたちで達成される」と述べている。つまり、「課外」活動は「課内」活動とともに、本来の大学の使命である学生の教育的発達において本質的な部分を形成している、という認識である。「課内」活動を主とし、「課外」活動を従とするべきであるか、あるいは「課内」活動と「課外」活動を大学教育として有機的に結合させるべきであるか——。本稿に報告した分析結果を一般化しうるとするならば、わたしたちは大学教育のあり方を考えていく上で大きな岐路に立たされているともいえよう。

本稿では、学生の「大学生活に対する関与 (involvement)」、とくに大学1年次における「課内」活動と「課外」活動への関与のありかたが、以降の卒業するまでの学生自身の変容にどういう関係をもってくるのかを吟味した。ところで、Lacy (1978) はこのような角度からのアプローチをより精緻化して“大学生の社会化モデル” (model of college student socialization) として呈示している。かれによれば、「大学生活に対する関与」が「大学における学生の相互作用の性質と内容 (対仲間関係と対教師関係)」というかたちで把握されている。大学生活において学生が経験する人間的な相互作用を考えたとき、“student-faculty interaction” についてはこれまで研究が一定に積みあげられてきている (Pascarella, 1980; Gaff

et. al., 1981). しかし, “student student interaction” と “student-faculty interaction” とを同時的にとりこんでその効果を分析しようとした研究は余りみられないように思われる (Lacy, 1978 ; Gregg, 1981). 大学生の行動発達やキャリア発達のメカニズムを解明していくうえで, このような多元的な観点に立ったアプローチが今後いっそう必要とされよう.

註

- (1) Astin はここでいう involvement の概念を「大学や大学のプログラムに直接関係する活動において, 学生によって費される時間と努力」と定義している. A. W. Astin, *Preventing Students from Dropping Out*. San Francisco: Jossey-Bass, 1975, 参照.
- (2) 天野 (1980, pp. 218-219) はわが国の大学教育 (とくに文科系学部) の非専門的ないし非職業的性格をもって, 実質的な「教養」学部化とみている. しかし, ここでいう「教養」はアメリカの大学にみられる「教養」教育とは一応区別して考えられるべきであろう.

参 考 文 献

- 天野郁夫「変革期の大学像—日本の高等教育の未来」日本リクルートセンター, 1980.
- Astin, A.W. “The Methodology of Research on College Impact (I)”. *Sociology of Education*, 1970a, **43**, 223-254.
- Astin, A.W. “The Methodology of Research on College Impact(II)”. *Sociology of Education*, 1970b, **43**, 437-450.
- Astin, A.W. *Four Critical Years: Effects of College on Beliefs, Attitudes, and Knowledge*. San Francisco: Jossey-Bass, 1977.
- Baltes, P. B., Reese, H. W., & Nesselroade, J. R. *Life-Span Developmental Psychology: Introduction to Research Methods*. Montrey: Brooks/Cole, 1977.
- Feldman, K. A., & Newcomb, T. M. *The Impact of College on Students, Vol. 1*. San Francisco: Jossey-Bass, 1969.
- Gaff, J. G., & Gaff, S. S. “Student-Faculty Relationships.” In A. W. Chickering and Associates, *The Modern American College: Responding to the*

大学生活は学生のキャリア発達にどのように影響を与えているのか

- New Realities of Diverse Students and a Changing Society*. San Francisco: Jossey-Bass, 1981, pp. 642-656.
- Gregg, W.E. "Several Factors Affecting Graduate Student Satisfaction," *Journal of Higher Education*, 1972, **43**, 483-498.
- Lacy, W.B. "Interpersonal Relationships as Mediators of Structural Effects: College Student Socialization in a Traditional and an Experimental University Environment." *Sociology of Education*, 1978, **51**, 201-211.
- Miller, T.K., & Jones, J.D. "Out-of-Class Activities." In A.W. Chickering and Associates, *The Modern American College: Responding to the New Realities of Diverse Students and a Changing Society*. San Francisco: Jossey-Bass, 1981, pp. 657-671.
- 南隆男ほか「わが国大学組織における学生の〈自我同一性確立過程〉の長期的追跡研究—予備報告1：産業組織におけるリーダーの〈社会化システム〉としての大学組織—」『組織行動研究』, 1977, **1**, 7-38.
- 南隆男ほか「大学組織における学生の自我同一性確立過程—総合的継時分析にむけての覚え書き—」『哲学』, 1980, **71**, 97-162.
- 日本リクルートセンター『進学動機調査』, 1980.
- Pascarella, E. T., Terenzini, P. T., & Hibel, J. "Student-Faculty Interactional Settings and Their Relationship to Predicted Academic Performance." *Journal of Higher Education*, 1978, **49**, 450-463.
- Wakabayashi, M., et. al. "Japanese Private University as a Socialization System for Future Leaders in Business and Industry." *International Journal of Intercultural Relations*, 1977, **1**, 60-80.